

	研究代表者	浜松医科大学・子どものこころの発達研究センター・教授 千住 淳(せんじゅう あつし)	研究者番号:00557738
	研究課題情報	課題番号:26A102 キーワード:共在、社会性、コミュニケーション、情報通信技術、ロボット	研究期間:2026年度～2030年度

なぜこの研究を行おうと思ったのか（研究の背景・目的）

●研究の全体像

ICT（情報通信技術）やロボット、AI（人工知能）の急速な進展や人口動態、社会構造の急速な変容に伴い、他者と共に在ること——共在——の現実が、今まで大きく変わりつつある。この急速な社会変化や、深刻化する孤立・孤独という社会問題の顕在化から、人文社会科学が扱う「人と社会と文化」という中核的なテーマのうち、個人と他者との関わり、個人と社会との関わりに関して、「共在(copresence)」という概念を中核に据えた新たな研究分野を「共在研究領域」として創成する。「共在」とは、古くは社会学者Goffman（1963）の著作に、「（自己と他者が）お互いへの（社会的）アクセス、働きかけ、対象化が可能である状態」(accessible, available and subject to each other)を指す用語として現れた概念である。

共在研究領域では、ヒト社会の多様性からヒトの文化や行動を相対化する社会学・人類学・地域研究、規範や概念整理を扱う倫理学・哲学、こころや脳の働きに焦点を当てた社会心理学・発達心理学・社会神経科学、さらには共在の様相を変えつつあるICT技術、ロボット・AI技術開発による実践的展開との間に有機的な学融合を引き起こすことにより、現代社会においてその重要性をますますと見せつけつつある「共在」について新たな知の体系を構築し、社会基盤・社会構造の新たな理解・再解釈につながる学問の創立を目指す。

この目的を達成するため、本研究領域は以下の構造をとる（図1）。まず共在の社会的・発達の基盤の理解を図る（研究項目A：共在基盤）。次に、現代社会において拡張・多様化する共在のあり方について、特にICT技術の普及に伴う「今ここ」を超えた共在の拡張、ロボットやAI技術などによってヒト対ヒトの文脈を超えた共在の拡張に焦点を当て、実証研究と実践的展開、人類史において報告されている共在の多様性の参照、相対化から統合的に理解し、実践的展開につなげる（研究項目B：共在拡張）。最後に、とすれば厳密な定義や述定が極めて困難である「共在」という概念を、上記の実証的アプローチと密に連携しながら理論化し、概念整理、関連学問分野との連結を行い、共在研究の理論的基盤を構築する（研究項目C：共在理論）。



図1 本領域の概念図

●研究戦略

研究項目A（共在基盤）では変わりゆく社会構造や技術革新の中で現代のヒトがどのように他者との共在実現、共在と社会構造、共在の発達について示唆を得るため、現代社会における共在のあり方（**共在社会, A01**）及び次世代の共在を生み出す文脈（**共在発達, A02**）の実証研究を行う。

研究項目B（共在拡張）では、現代社会における共在の急速な変容を象徴する2事例である、ICT技術による共在の時空間方向への拡張（**共在時空, B01**）、ロボット・AI技術に象徴される共在アクターのヒトを超えた拡張（**共在アクター, B02**）に注目する。それぞれについて、共在概念の文化差・地域差や、伴侶動物など、人類史において見られる共在多様性事例を参照した理解と相対化、実践的展開を目指す。

研究項目C（**共在理論**）では研究項目A・Bと強く連携して、共在という概念を理解・概念整理・理論化し、共在研究を学問として創成・発展させるための理論的・規範的な枠組みを構築する。

これらの計画と公募研究を有機的に連携させ、共在の統合的理解・実践的展開に繋げる。

この研究によって何をどこまで明らかにしようとしているのか

●本領域の達成目標

本領域では、現代社会において急速に変化・多様化する共在のあり方、共在を成立させる社会的、文化・技術的、生物学的要因、さらには共在とより「高次」な社会的相互作用や個人・社会のウェルビーイングとの関連について理解し、理論化し、実践的に展開するための学問的な枠組みを構築する。

●本領域から期待される成果（R8-R10）

- 多様なフィールド研究から共在を生み出す構造やマクロ・ミクロ要因を統合的に理解、定量的な計測指標と連携。
- ICT、ロボット技術などにより形成された新たなフィールド、新たなアクターとの共在について、機序を解明、実践へと展開。
- 共在に関わる学問間の相互理解、理論・実証・実践研究を統合する基盤の構築。

これらの成果から、現代社会における共在の統合的な理解、実践的展開に繋げる。

●本領域から期待される成果（R11-R12）

公募研究や計画研究間の統合・連携から、「共在学」の立ち上げ、以下の成果へと繋げる。

- 多様で個別的な共在から社会を捉える、新たな理解・実践の枠組みを提供、さまざまな分野の研究フィールドと連携。
- ICT、AI、ロボットなどの技術革新によりもたらされる、新たな共在を理解・実践する学問的基盤構築。
- ある意味価値中立的な共在の理解を基盤として、社会の急速な変容・多様化にえられる新たな人間観、新たな社会観を提案、理論・規範研究の幅広い巻き込み、議論の展開。



図2 多様な共在のイメージ